医師

「急性呼吸器疾患について ～肺炎球菌ワクチンで予防を～

呼吸器内科副部長　町田　和彦

冬は「かぜ症候群」「気管支炎」「細菌性肺炎」などを中心に急性呼吸器疾患を発症しやすい時期です。ほかに季節とあまり関連ないものとしては、間質性肺炎（急性増悪）、気管支喘息発作、気胸などもみられます。間質性肺炎や気管支喘息は、咳、痰、呼吸困難などの感染症に似た症状がみられることが多く、細菌やウイルスなどの感染症を合併したり、感染症に続発する場合もあります。このため、症状だけで疾患を特定することが困難な場合があり、細菌検査、画像検査、採血などが必要となります。

通常の「かぜ」であれば、ほとんどはウイルスが原因であり十分な休養や栄養、保湿などで自然に改善します。しかし、１週間以上症状が持続したり悪化したりする場合には他の病気の可能性があり、とくに高齢者、乳幼児、妊婦や慢性呼吸器疾患、心疾患、糖尿病などの基礎疾患を有する場合には肺炎などを合併する場合もあるので注意が必要です。

「気管支炎」や「細菌性肺炎」では病状にあわせて補液や抗生物質の投与を行いますが，全身状態が悪い場合には入院治療が必要となり、重症の場合は集中治療室での治療となります。「間質性肺炎」や「気管支喘息」も呼吸状態などにより精密検査、治療方針を決定します。

とくに冬は感染症により悪化する疾患が多く予防が重要です。手洗い、うがい、マスクの重要性は言うまでもありませんが、最近マスコミでよく取り上げられている「肺炎球菌ワクチン」をご存じでしょうか。平成23年の厚生労働省の統計によると、肺炎は脳卒中を上回り、日本人の死因第３位になりました。そのうち肺炎球菌という細菌により起こる肺炎に対しては、ワクチンによる予防が可能となっています。このワクチンは１回の接種で肺炎球菌の約90種類の型のうち23種類の型に対して免疫をつけることができ、これだけでも成人の肺炎球菌による感染症の80％以上がカバーできます。さらに、予防接種により肺炎球菌だけでなく、その他の病原菌による肺炎の発症抑制や死亡率低下にも効果があると報告されており、高齢者、慢性疾患を有する方などは積極的におすすめしています。肺炎にかからない訳ではありませんが、予防接種による効果は大きいと考えられています。ただし注意点があり、１回目の接種から約５年間有効とされるため再接種が必要であり、２回目以降の接種では副反応（注射した部分が赤く腫れ、強く痛むなど）がより生じやすいとされます。

冬はインフルエンザワクチンと併用することで発症率や死亡率の減少にさらに有効と言われます。できるだけ、11～12月頃までにインフルエンザワクチン接種も心がけましょう。なお、各自治体では高齢者や乳幼児などを中心にした助成制度もあります。ご不明な点があれば当院までお問い合わせ下さい。